



気温が上がり、芝が動き出すといよいよシーズン到来です。冬季の芝生には低温や乾燥によるストレスが掛かっており、気づかいうちにダメージが蓄積しています。蓄積したダメージを放置せず、夏越しに向けてコンディションを整えていきましょう。

3月・4月の管理ポイント

高親水性土壤用界面活性剤

バイタルドロップ

高親水性のバイタルドロップは、散布時に葉の表面や表層の撥水性土壤に付着する量が少なく、深い層まで素早く届いて処理層を形成します。散布液が高濃度になる少水量散布でも高い効果が得られます。ドライスポットの予防と治療、どちらの目的でも使用できる利便性の高い土壤用界面活性剤です。

土壤水分を低めに保ちたい場合はレボ、スポット処理には手撒きしやすい粒剤タイプのハイドレーターGがおすすめです。

ドライスポットの予防 使用量：1ml/m²/月 散布水量100ml/m²以上

ドライスポットの治療 使用量2ml/m² 散布水量100ml/m²以上

サッチの除去
土壤環境の健全化

サッチクリーナー

サッチ成分のセルロース・ヘミセルロースを分解する酵素を主成分とした、酵素タイプのサッチ分解剤です。酵素そのものを散布するため即効性に優れており、サッチ分解量をコントロールすることが可能です。

液剤であるため取扱いやすく、フィルターに詰まりません。農薬との混用や近接散布も可能です。土壤の透水性を改善しましょう。

土壤微生物が活発な時期になるので、微生物タイプのサッチ分解剤「サッチ・マネージャー」もおすすめです。

使用量：グリーン0.2ml/m² ラフ・FW・Tee0.1-0.2ml/m² 散布水量0.2-0.5l/m²

病害予防に

グリーンオキシラン水和剤

グリーンオキシランは有機銅とキャプタンが有効成分の防除剤です。着色剤入りで希釈液が緑色なので、散布した後の葉が黄色くならず、美観を損ないません。幅広い病害に効果があり、更新作業時の保護殺菌にお勧めです。

使用量：バントグラス_希釈倍率300-500倍 1-2l散布/m² 日本芝 希釈倍率500倍 1-2l散布/m²

光合成だけでは足りない
養分の補給に

グリーンメカ

生育期を迎え芝生の活動が活発になると、大量のエネルギーが必要になります。しかし気温が低いと光合成スピードが遅く、必要量のエネルギーを作り出すことが出来ません。

貯蔵養分を使い込む前に、糖・アミノ酸・ミネラルたっぷりのグリーンメカで足りないエネルギーを補給しましょう。

使用量：2~10ml/m² 散布水量：1l/m²

池の水をきれいなブルーに

ワラーブルーL

池がきれいなブルーになりコースの景観が良くなります。ワラーブルーLに含まれる2種類の色素で、水生植物(アオコなど)の光合成に必要な光(430nm、630nm)を遮り、増殖を抑えます。増殖が始まる前からの使用が効果的です。安全性の高い食用色素を使用しているため、着色した池の水を芝生への散水や薬剤散布にも利用できます。

使用量：500ml/水500トン

池の水質改善に

セラクリーン

セラクリーンは、池に散布することで水中の悪臭原因物質を吸着し拡散を防ぎます。またカルシウム等のミネラル分をゆっくりと放出して水質の悪化(酸性化)を防ぐことで、池の水質浄化に優れた効果を発揮します。即効性の粉タイプと遅効性の顆粒タイプがあります。気温が低く微生物やアオコなどの活性が低い時期から、池の水質改善を行いましょう。池の掃除後の使用も効果的です。

使用量：5~10袋(100~200kg)/1,000m² 5~10袋(100~200kg)/水1,000トン

サッチ分解剤は管理資材として古くから市場にありましたが、その効果を実証したデータはあまり多くありませんでした。弊社では、数年かけて実証データを集め、昨年6月の日本芝草学会春季大会にて学術発表を行いました。今回は本発表の内容の一部抜粋して紹介します。

【試験条件】

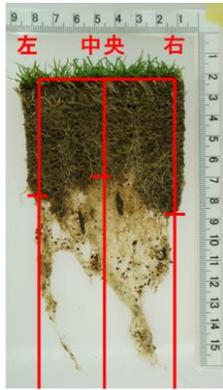
試験地: 静岡県ゴルフ場(ペンクロス、造成約25年)

期間: 2022年2月~9月

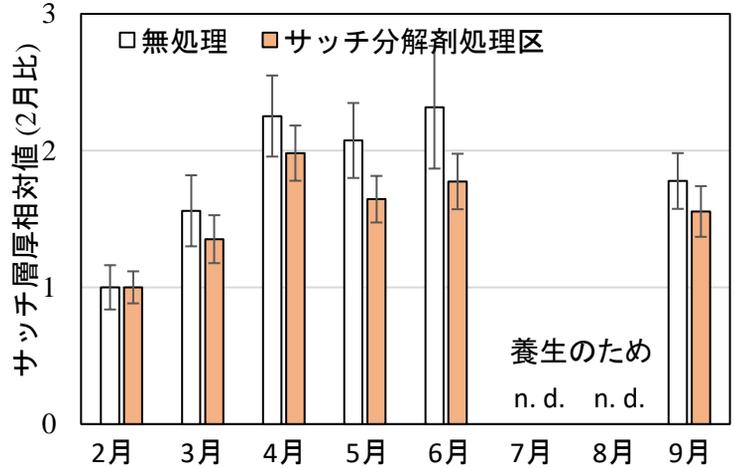
処理方法: 月に一度の推奨使用量の散布(2月~5月の計4回)

調査方法: 土壌抜き取りによるサッチ層厚調査(上図)、コンパクション測定(下図、Trufirm®(Spectrum社)を使用)

サッチ層厚



ソイルサンプラーで試験地を抜き取り、1mm網の上で洗浄した。サッチ層厚は裏から光を透かし、透過されない部位をサッチ層厚とし、左・中央・右の三点を測定し、その平均値を集計した(上中央図)。

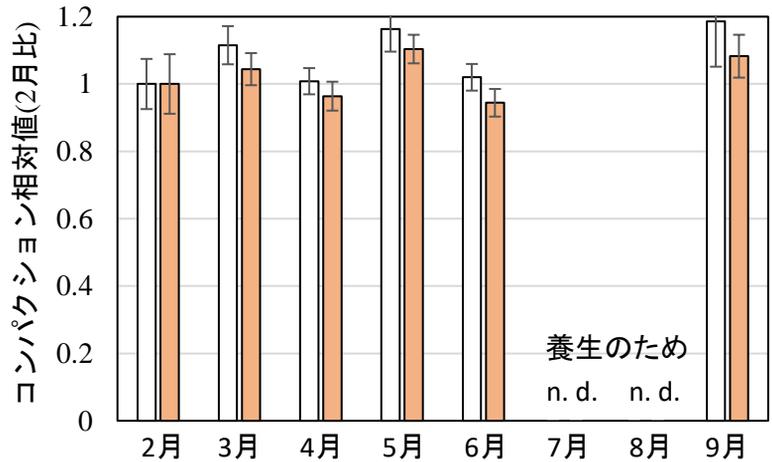


処理前の2月からサッチ層厚は増加傾向であったものの、無処理区と比べてサッチ層厚が薄くなるのが分かった。興味深いことに、散布は5月が最後であったが、9月でもこの関係は維持されていた。したがって、サッチ分解剤のサッチ分解効果は、サッチ層厚を減らすことで夏越しに貢献できることが示唆された。

コンパクション



コンパクションは土壌の固さを示す数値である。試験地に対し、Trufirm(下中央図)を用いて27回(9回/m²)測定しコンパクション値として集計した。なお、本測定機は、円筒内の金属棒を一定の高さから落とし、そのへこみの深さを測定することでコンパクションとしており、数値が低いほど固い。



処理前の2月からコンパクションは増減傾向であったものの、無処理区と比べて低い(=土壌が固い)ことが分かった。前述と同様に、散布終了後の9月でも処理区のほうが固かった。したがって、サッチ分解によって土壌を固くし、ボールスピードを上げるなど、ターフクオリティへの貢献も期待できることが分かった。

サッチ分解剤は、普段目にしない土壌中をターゲットとした資剤です。また、サッチは多くの問題の原因であるといわれていますが、サッチが減ったらどうなるか、ということについてはあまり知見がありません。本発表では、サッチ分解剤がターフクオリティに貢献できることを示唆できる新しい知見だと考えます。芝生にとってサッチは大きな課題です。サッチ管理の一助としてぜひご一考ください！